

平成 29 年度 研究成果報告書  
Research Achievement Report FY2017

講座名・職名 Course Title・Job Title	日本語・日本文化専攻 講師
氏名 Name	儀利古 幹雄
専門分野 Academic Field	音声学・音韻論・社会言語学・認知心理学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	音象徴に関する社会言語学的研究
<p>本研究の目的は、言語普遍的な側面が強調される傾向にある「音象徴」と呼ばれる現象を、社会言語学の観点から捉え直し、音象徴は話者の属性や文化的背景に影響を受けうるものであることを実証的に明示することである。</p> <p>29年度は主に、子音と色の共起関係について研究した。具体的には、阻害音で構成された無意味語（例：サタカ、ゴトソ）は（少なくとも日本で）典型的な男性らしい色とされる青を、共鳴音で構成された無意味語（例：マラナ、ヨノモ）は（少なくとも日本で）典型的な女性らしい色とされるピンクを想起させるかという問題を明らかにするために、10-20代の若年層（男性10名/女性10名）と50-80代の高年層（男性10名/女性10名）に対して調査を実施した。</p> <p>その結果、阻害音は青のイメージを喚起し、共鳴音はピンクのイメージを喚起することが明らかになった。注目すべきは、この音象徴には統計的に世代差が観察されたことである。若年層は「阻害音=青/共鳴音=ピンク」の結びつきが比較的弱かったのに対し、高年層においてはこの結びつきがより強く観察された。このことには、1980年代以降盛んになったジェンダーフリー化が影響を及ぼしていると考えられる。1985年の男女雇用機会均等法を始めとして、女性差別撤廃条約の批准、育児介護休業法、選択的夫婦別姓、男女共同参画基本法など、政策面で大きな動きがあったのが今の10-20代が生まれた頃である。それに加え、80年代前半には男女混合名簿の導入があり、90年代前半には家庭科男女共修制度に代表されるジェンダーフリー教育が叫ばれるようになった。これらの文化的背景が、若年層における「阻害音=青/共鳴音=ピンク」という音象徴パターンを薄れさせる要因となっていると考えられる。</p> <p>以上のことから、音象徴とは、決して言語普遍的なものとして存在するのではなく、話者の文化的背景に色濃く影響を受けるものであると言える。今後の課題としては、日本語話者とは明らかに異なる文化的背景を持つ非日本語母語話者（例：イタリア語話者、タイ語話者）に対する調査が挙げられる。</p>	